424
特254
499
140

# 必勝日本

## 中山爲信

決戰體制下の布教目標

一、必勝信念の昂揚

一、戰時生活の確立

一、挺身奉公の實踐

始

特254
499

# 必勝日本

中山爲信

## 目次


神國日本……一
支那事變の性格・宣戰の詔書・神命による戰ひ

神命の戰……七
驚異的大作戰・大御稜威の御加護・ハワイ空襲とマレイ戰・日本の信仰

歷史の事實……二三
肇國の事實・萬世一系の皇統・北畠親房卿と神皇正統記・皇國の非常時と肇國の回想・アメリカ人と國旗・米英が持つ戰勝への期待

必勝の歷史……二〇
三韓征伐・元寇・日清、日露の兩役

詔勅に生きる……二三
日本臣民の信仰・吉田松陰の言葉・天理敎々典衍義の叙述・アメリカ兵の信念

米英的思想の擊滅……二六
現代戰の性格・科學日本の勝利・日本が失へるもの・アジアの再認識・米英的思想の殘滓

或る會話と享樂主義の夢・大東亞戰爭とは・豐富な資源を處理する精神・戰時生活の意義

報恩・感謝の精神……三五
節米問答・敎祖様の敎へ・積極的な節約

生活即傳道……三九
生活と傳道・時代は敎家に何を要求するか・われ〳〵の生活はおたすけ生活一つ

生活と奉公……四三
炭坑ひのきしんの經驗・われ〳〵の錬成・生活即行・日々の修業・滅私奉公の眞意義・一手一つと批判

ひのきしん……五〇
挺身奉公の實踐・勤勞奉仕とひのきしん・ひのきしんとお救け

運命を擔ふ者……五六
時代の激しい變動・新しい天理敎・時局便乘主義の排斥・天理敎の活動・大殿堂の建設


# 神國日本

どうするのか？

どうなるのか？

皇國の明日について、しきりにかう考へた時があります。これを近頃のことで云へば、支那事變がはじまつてから昭和十六年十二月八日まで、われ〳〵庶民の間にこの考へが一掃されなかつたのであります。戰へば必ず勝つ、一度として負けたことがない、攻めては勝ち、攻めては勝ち、どこまでも勝ち拔いてゆく。北支は忽ちにして日の丸に埋まり、南京が陷ち漢口が陷ちる。遂に蔣政權を重慶の奥地に追ひこみ中原には汪精衞を主席とする新中國が樹立される。かういふ明らかな戰勝と建設の目覺しい事實を見ながらも、われ〳〵庶民の胸から、『どうするのか？　どうなるのか？』といふ考へが拔けきらなかつたのであります。

これを言葉を換へて申しますならば、果して對蔣膺懲の征戰だけで、事變最終の目的とする東亞共榮圏の確立といふことが可能なのだらうか、もつと根本的な道があるのではないだらうか、――かういふことであります。

この考へが、事變の進展とともに強く激しくなりました。それは米國と英國とが常に美名にかくれて東亞における利權を擁護獲得しようとして蔣介石を使嗾援護する能度が露骨になり、遂には、白日これ見よがしの援助をするばかりか、英蘭を誘うて經濟封鎖をするまでに至つたからであります。思へば支那事變のために、われ〳〵はどれくらゐ尊い犧牲を拂つたか知れません。巨億の富は云ふまでもないことながら、多くの同胞が、護國の華と散つたのであります。しかもこの犧牲は、蔣の彈丸にたほれたのではなくて、實は米英の彈丸にたほれたのであるといふことが、ビシ〳〵とこの胸にひゞいてまゐりましたとき、われ〳〵の悲憤はやるかたがなかつたのであります。

「頑迷なる米英。



日本の聖業に何故かくまでも無理解なのか。

利權漁りにたゞ汲々たる米英、――そのルーズベルトやチャーチルの言葉を新聞に見るとき、われ〳〵は本當に唇を嚙んで、その迷妄に憤懣を覺えるばかりでありました。

さりながら、日本の戰爭は常に聖戰であつて、自ら事を構へて火蓋を切るのでありません。されば、わが政府におかれては、米英の反省を促すこと、一再に止まらず、隱忍に隱忍を重ね、平和の裡に解決しようと、まさしく萬策を盡されたのであります。畏れ多くも先般下し給うた詔書に、

朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ

と仰せられてゐますとほり、最後の最後まで裡を說きつくしてゆくのが、世界の指導者として神國日本の變らぬ態度であります。

ワシントンにおける日米會談のことは、われ〳〵の記憶に、まだ生々しいことであります。波高き太平洋を望んで、われ〳〵はこの會談の成立をどれほど熱願

したことでありませう。米英の飽くなき態度に腹立たしさを覺えれば覺えるほど、しかしまたわれ〳〵は、世界の何れの國よりも兄姉の立場にあるのだといふ大きな心をもつて、說いてきかせることのできる日を希つたのであります。

こゝまで盡したわれ〳〵の衷情でありながら、うらむらくは遂に彼の耳にはいらず、返つて日本與し易しとさへ見て不遜云ふべからざる態度に出たのであります。

今こゝに至つては萬策は盡きました。

天皇陛下におかせられては、畏れ多くも、

洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナランヤ

と歎じ給うて、米英に對して戰端を開くべしとの聖斷をくだし給うたのであります。

この大詔をこの耳に承つたとき、一億臣民の熱血はたぎりたちました。肅然と襟を正すとともに、腹の底からこみあげてくる感激をどうしやうもなく、たゞ



有難涙にかきくれたのであります。今はもう全てが解決したのであります。會談が成立するか否か、支那事變の結末が何處に來るか——さういふ懸案は、一瞬にして消え去り、肇國必勝の信念に燃えて起ち上つたのであります。

まことに十二月八日、この日をかぎりとして、

『どうなるのか、どうするのか』

が、ふきとんでしまひました。われ〳〵の思考の中から、疑問符はも早や全く消えてしまひました。今はたゞ、一切の人間思案をすてゝ、神命のまに〳〵、最後まで戰ひぬくことたゞ一つとなつたのであります。

天に二日はありません。神命また明らかに一つであります。神明を上にいたゞき、さうして、神命をいたゞいた時に、われ〳〵日本臣民は、誰から命令されなくても、誰から號令をかけられなくても、一切をすてゝ、欣然として神命のもとに馳せ參じられる幸せな國民であることを、われ〳〵は、この胸に深くきざみこんでおきたいと思ふのであります。

申すも畏き極みながら、　天皇陛下はわが肇國の神樣と御一體にましまし、至尊の現御神にておはしますのであります。われ〳〵は、今日、この現御神樣の御命のまゝに起つてをるのであります。世界のいづくに、かういふ惠まれた國がありませうか。これほど力强い、神の御聲をきける國がありませうか。

人が人に命令するだけならば、何時でも、何處でゝもできることでありませう。然しながら、神の御聲によつて起ち上るといふのは、何としてもわが日本一つであります。こゝにおいてかわが日本帝國の國體の、宇内に冠絶するものであることが明かになるのであります。

神の御命なるがゆゑに、これを畏んだわれ〳〵の態度は絶對信順であります。挺身奉公であります。これがもし人間の命令ならば、どうしても人間對等のことでありますから、なか〳〵、さうはまゐりません。今更、事新しく言ふまでもないことながら、わが國が世界のどこの國と戰つても、かならず勝つといふことは、その根本に、



『大日本は神國なり』

といふ事實が儼然として存在することを、何よりも先づ銘記すべきであります。

## 神命の戰

『時はすべてを創造する』

といはれてをります。一應はいひ得た言葉であります。

今日、渺茫たる太平洋上に行はれてをります我が大作戰を見ますとき、一入その感を深くしないではゐられません。はじめ、支那大陸に聖戰の進められてゐました當時、われ〳〵はその大規模な作戰におどろいたのであります。或はまたその後、盟邦ドイツが電擊戰をやつたとき、われ〳〵はそのすばらしい戰果の事實に感歎の聲を放つたのであります。さうしてドイツがこれだけのことをやれるなら、御稜威の加護と日本の實力をもつてすれば、日本はもつともつと大きなこと

ができる筈だと思へるに至つたのであります。廣漠たる太平洋と雖も、その攻略は我が掌中にある、太平洋はおろか、英が命と頼むシンガポールも我が據點となつて、印度洋の作戰を意のまゝにするのだ――と、かういふ夢を描いたのであります。素人の夢には違ひありませんが、南進日本の聲が高くなるにつれて、私などは何時しかこれは夢ではないやうにさへ思へたのであります。

さりながら興奮をしづめて靜かに地圖にむかひ、――この渺茫たる大洋と、この無數の島々とを攻略するのに、一體どれだけの船と兵とが要るのだらうか？これはとても支那大陸の比ではない――と、かう考へますと、いかに口では輕く云ひ得ても、なか〳〵實現されることではないと、殘念ながらも思ひを飜さざるを得なかつたのであります。

さうしたつい昨日までの不可能事が、今日は鮮かな可能事として、われ〳〵の目の前にくりひろげられてゐる。これは考へれば考へるほど實に容易ならんことであります。正しく『時』はこの世紀的創造をやつてのけたのであります。



しかしながら、果してわれ〳〵は、この偉大な事實にたいして、たゞこれだけの考へ方で滿足できるでせうか。われ〳〵のやつてゐるこの世紀の偉業を、他人事のやうに『時の創造』とかたづけてしまつて、それで承知できるでせうか。すくなくとも私は、絶對に滿足できない者の一人であります。

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

と、宣戰の大詔の冒頭に仰せ下さいましたこの『天佑』を保有し給ふ天皇陛下の大御稜威を忘れてをつて、右の事實はたうてい解決できることではありません。寔に天佑を保有し給ふ　天皇陛下の大御稜威の然らしむるところであつて、それ以外のすべての力はこの御稜威の中にあつて、それ〳〵の役割を果すものであることを、我々は深く銘記すべきであります。

大東亞戰爭の大作戰と、相つぐ戰捷とは、戰捷國民たるわれ〳〵自身さへ自信をもてなかつたことでありますから、敵性國はもとより、あらゆる外國人が、こ

の事實を知つてどのやうに驚歎してゐることかは想像にかたくありません。これは明かに神策であります。神業であります。さうしてまた、この神策と神業とをいたゞいて、一切をうちわすれて戰ふ將兵の働きの賜であります。しかも、如何に忠勇無比なる我が將兵といへども、もし神命なかりせば、御稜威の加護なかりせば、かくは働き得ないであらう、かくは挺身し得ないであらうといふことに思ひ至りますとき、神命とあるならばわれ〳〵は、如何なる不可能事をも、きつと可能にしてみせるといふ確信を持つのであつて、またさうした皇國の民であるといふ自覺に生きないではゐられないのであります。

歴史の事實によつて見ても、このことは明かであります。天皇陛下とわれわれ臣民との間に何物も介在しない——申すも畏れ多きことながら大御親にまします陛下と、その赤子としてあるわれ〳〵。それは、神と人とが親と子のあひだからにあるといふ強い自覺がわれ〳〵の胸に生きるとき、われ〳〵日本人はいつ如何なる時も必ず不可能を可能とし、絶望を希望に廻らして來たのであります。



昭和十六年十二月八日、宣戰の大詔を承つて感激に高鳴つてゐるこの胸に、ハワイ空襲のニュースはこの感激を更に大きく深くしたのであります。緒戰におけるハワイ攻擊、誰がかういふことを思ひ得たでありませうか。日米戰を豫想していろ〳〵の書物が出てをりますが、小説においてさへ、こればかりは餘りにも空想すぎるとて、取扱つてゐないと申すではありませんか。誰もが不可能事として考へもしなかつたことを、ものゝ見事に敢行したのがわが日本海軍であります。しかもこの大戰果の蔭に、特殊潛航艇の九軍神の鬼神も亦哭く決死行があつたことを明かにされるに及んで、われ〳〵は今更のごとく、われ〳〵の血の中に流れてゐる日本人の信仰に覺めないではゐられなかつたのであります。

また、マレイ戰における陸軍の快速ぶりは、世界戰史に輝かしい記錄を殘しました。これは正しく神速であります。そしてこの神速の進擊をなし得た所以のものは、これまた、大君の御楯と生きるわれ〳〵日本人の信仰であります。

されば、かゝる信仰に生きるわれ〳〵は、いつも必勝を信じて疑はないのであ

ります。いかなる戰ひにも絶對に負けを豫想したことはないのであります。神のみいくさであるからには、必勝は疑ひのないところとして堅く堅く信じ切つてゐるのであります。

しかし、われ〳〵は、何の據りどころもなしに、空想してゐるのではありません。これは、われ〳〵の信仰であると共に、日本の二千六百年の歴史の事實がこの信仰を明らかに、うらづけてくれてゐるのであります。つまり、日本の必勝の歴史の事實の上に立つて、今日われ〳〵は必勝の信念に生きてゐるのであります。

## 歴史の事實

二千六百年の歴史の事實として、私は何よりも先づ二つのことがらを擧げたいと思ひます。

それは、肇國の事實であり、而して萬世一系の皇統であります。



この二つの事實を、靜かに考へてみませう。心を空しうして瞑目して考へてみませう。

靜寂たる夜半、一人端座して、深くこの事實に考へ及ぶとき、常に私はそのあまりの崇高さに肅然として襟を正さないではゐられないのであります。萬物なべて流轉する中に、この二つの事實ばかりは、日月の光り輝くがやうに、あくまでも炳乎として明かであり、不易であります。西洋の二千年史、支那の四千年史、それはたゞ目まぐるしいばかりの、戰の歴史であり、帝王の隆替史であり、樣々の民族と國家との興亡史であります。これはまさしく流轉の世相であります。

思へば、天壤とゝもに窮まりなく、萬世一系の　皇統を頂くわが日本歴史の事實こそは、この世に、たゞ一つきりの事實であります。しかも、この事實は歴史の記錄の上の一片の事實ではなくて、われ〳〵の信仰のよりどころとしての事實であることが、世界のいづれの國にもその類例のない崇高なものであることに思ひいたるとき、心の奥底からなる感激を覺えにずはゐられないのであります。

申すまでもなく肇國の事實は、われ〳〵の信仰の根本であります。肇國とゝもに、天壤無窮の皇運が天つ神樣によつて定められたからであります。されば、われ〳〵が我が國體に對してもつてゐる信仰は、肇國の事實を外にしてはなりたゝないのであります。われ〳〵が日本臣民としてあるかぎり、さうして國體の信仰に生きるかぎり、肇國の事實はいつも新しくわれ〳〵の信仰の根本となつて生きつゞけるのであつて、かくてこそ肇國の歷史は、單にすぎさつた遠い大昔の一回かぎりの事實ではなくして、今もなほ新しい――さうして未來永遠に新しい事實なのであります。

これは理論ではありません。顯かな事實であります。それは、御歷代の天皇が常に、皇祖、天つ神々と御一體にましまし　天皇陛下の御中に、皇祖、天つ神々を仰ぎ奉り、更に代々承け繼がせ給ふ歷代天皇の御靈德を拜するがゆゑであります。然も　天皇陛下は萬世一系にまします。われ〳〵は何時如何なる世代においても、　天皇陛下を仰ぎまつる中に、肇國への回想が鮮かになるのであ



りまして、かくて、皇統が永遠であるかぎり、肇國はまた永遠の現在となるのであります。

永遠に新しい事實――といふことは、言葉をかへて云へば眞理といふことであります。すなはち、わが肇國の事實こそは、世界の眞理なのであつて、眞理なるがゆゑに『八紘一字』といふ理想が成りたつわけであります。

北畠親房卿は『神皇正統記』に、このことを、

『天地の始めは、今日を始めとする　理なり』

と云はれてゐます。わづか十七字ではありますが、實に偉大な言葉であります。天地の始めは、今日を始めとする　理なり――この上もなく簡明なことばでありますが、よく肇國の事實が永遠の現在であることを物語つてゐると思ひます。

北畠親房卿といへば、逆臣相ついで現れ、天日ために暗かつた六百年昔の時代を思ひます。國歩この上なく艱難の時代であります。『どうなるのか？　どうするのか？』全く明日の日をも期しがたい時代であります。しかも、かういふ危い

時代にあつて、眞に國を憂ふる人の胸に、この肇國の事實が浮び上つたといふことは、われ〳〵の絶對に見逃してはならない、また忘れてはならないところであります。

降つて明治維新の前後はどうであつたでせうか。當時のわが國にはほとんど國防といふべきものがなかつたのに、英・米・佛・露・蘭といふ國々の軍艦がやつてきて、わが國に大砲をぶつぱなして威嚇したのであります。危いと云へばこれほど危かつた時はありますまい。しかし、その時にも、憂國の志士の胸に強く生きたものは、やはり肇國の事實であつて、その信仰に燃え立つきはみ、笑つて國難に殉じていつたのであります。

思へば肇國の事實は何時の世にも新しい生命を以て生き生きとしてわれ〳〵の胸に甦つたのであります。親房卿が筆をとられたその日にも、肇國の事實は尊く回想されたことでありませうし、それから六百餘年を閲した今日においても、この事實は變らぬ新しさをもつて大東亞戰爭をたゝかふわれ〳〵の胸に回想されてゐるのであります。



二千六百年を通じて、皇國の危機に際しては、この信仰が必ずよびおこされて、いつも狂瀾を既倒に回したのであつて、今日の日本の直面してゐるこの有樣が、二千六百年未曾有のものであればあるだけ、この信仰も亦、火のごとくはげしいのであります。

いたいけな子供までが、往け八紘を宇となし、と唱つてゐます。現代のわれわれの考へは、あらゆる場合に、その根柢を悠遠の古なる肇國においてゐるのでありまして、私は、日本の歴史において、今日ほど肇國の精神が日本臣民の心に生きた時代はなからうと思ひます。それゆゑに、われ〳〵は挺身して大東亞戰爭をたゝかへるのであり、それゆゑにまた、いつも必勝の信念に生きられるのであります。

私は、われ〳〵が非常の時にのぞむたびに、歴史の事實に信仰を燃やし得らるる日本臣民であることを、どのやうに感激しても感謝しても尚、そのすぎること

はないと思ふのであります。

それにつけても思はれるのは、アメリカの事情であります。

氣の毒にもアメリカ人は、アメリカの國自身にその據るべき絶對の中心を持つてゐません。勿論ルーズヴェルト大統領は今日の中心勢力でありませう。しかしそれは、大統領としての任期が盡きればやがて變るべき中心であつて、決してアメリカ國に終始一貫する中心ではありません。これでは、彼等米國人の單なる一時的な統治者に過ぎず、信仰の目標とまでならないのは當然すぎる位當然なことであります。それでは彼等は何をもつてアメリカ國に信をつないでをるのでせうか。それはただ一つ、國旗があるばかりであります。

先年渡米いたしましたときに、私はある役所を訪ねましたが、その事務室にゆくと、役人達の机の上に小さい國旗がたてられてゐるのを見たのであります。それはこの星條旗の一枚を彼等アメリカ人の信を國家につながしめるたゞ一つの據りどころたらしめるためでありますが、しかし、その星條旗の光となるべき歴史



の事實に、果して何があるのでせうか。

自由と平等とを口にしながら、まるでその反對の侵畧と黄金萬能の享樂主義の惡夢こそあれ、我が日の丸の旗の中に輝く、天壤無窮の皇統をいたゞく誇りと、『八紘一宇』の聖願と、その聖願成就への國民をあげてのひたむきな尊い努力のあとがどこにあるのでせうか。イギリスも亦、然りであります。

かく考へてまゐりますれば、米英がもし戰勝を期待し得るとすれば、それは毫も國體にあるのではなくして、僅かにその有する武器の數だけであります。しかも今やその誇つてゐた武器への期待も、ものゝ見事にうらぎられて、さんざんの敗北ばかりであります。かくては彼等は一體、何をもつて起つのでありませうか。だがこの外に據るべき何物もないならば、結局は物に賴るより外はないのであります。唯物主義に生きてきた彼等が、かうして唯物主義のゆゑに倒れてゆく哀れな姿を正しくこの目に見るわれ〳〵は、ことさらに、崇高な日本二千六百年の歴史の事實に感佩するばかりであります。

# 必勝の歴史

まだ一度として負けたことのないのがわれ〳〵の歴史であります。今、そのわれわれが建國以來特に强大な外敵に當つた跡を考へてみたいと思ひます。

最も古くは神功皇后の三韓征伐であります。やんごとない、しかも女性の御身を以て、おん親ら外征の途につかせられた神功皇后、航海術の極めて幼稚な時代に堂々と大軍をしたがへさせられて、玄海の荒波を越え給うたその御勇武、さうして、たちまちにして任那政府を降伏せしめられ、此處に日本府を置かれるに至つた大勝。われ〳〵の歴史はすでにその外征の初めにおいて、かくも鮮かに勝を占めた輝かしい事實をもつてゐるのであります。

ついで元寇であります。元の大軍はその船に農耕の道具までも乘せて攻めてきました。日本を攻め、日本を滅し從へて、この來寇軍がそのまゝ日本の屯田兵と



なるといふ徹底した計畫であつたのであります。すくなくとも元軍は、必勝を胸にたゝんでの來寇であります。元軍のそれまでの思ひ出といへば、實に胸のすくやうな戰捷ばかりであります。アジアの東から遙か遠くヨーロッパにまで攻め入つて、國家と民族とをその馬蹄の下に踏みにじり、到るところに彼等をして城下の盟ひをせしめて來たのでありますから、小さい島國の日本などは、それこそ鎧袖一觸と思ひこんでゐたにちがひありません。しかし元の必勝の意氣は、舉國火と燃えあがつた皇軍の前には見るかげもなく挫かれてしまつたのであります。彼の領土的野心は、この神國日本には斷じて許されなかつたのであります。

次の思ひ出は、日清戰爭と日露戰爭とであります。いづれも大國と小國との戰ひであります。領土において、富において、兵隊の數において、軍艦や武器の數と質において、それは格段の相違でありましたが、勝利の榮光は物の數量の上には輝かないで、神命と共に戰つたわれ〳〵の上に光被したのであります。

思へば二千六百年の長い間、この神土に敵をして一指をも觸れしめずに今日を

迎へてゐるのであります。われ〳〵は、この歴史の事實を決して空しく見逃してはなりません。すでに申述べましたやうに、歴史の事實がかくある所以のものは、上に天佑を保有し給ふ　萬世一系の天皇陛下のあらせられるがためであり、下、大御業翼賛のためには挺身奉公の至誠をさゝげて惜まなかつたわれ〳〵の祖先の忠武によることであると、深くこの肝に銘じてゐるのであります。

必勝を期し得ないものはこの世の不幸者であります。必勝を期しながら敗れる者は、また悲惨であります。われ〳〵は、そのいづれでもなく、絶對に必勝をかち得るこの世界中にただ一つの國の臣民であることを、しつかりと自覺しなければならぬと思ふのであります。

## 詔勅に生きる

以上において、われ〳〵が必勝の信念に生きる理由を、歴史の事實の上から申



しあげたのでありますが、最後に私は、もう一つの重大なことがらを申さねばなりません。

それは、われ〳〵の詔勅信仰であります。

私ばこの小著のはじめに、今、われ〳〵は神命のまに〳〵米英と戰つてゐると申しあげておきましたが、申しあげたいことはこれであります。

### 詔勅に生きる

これは日本臣民の命であります。純粋無雜の絶對の信仰であります。昭和十六年十二月八日、宣戰の大詔をいたゞくや、たちまちにして日本晴れのやうな氣分となり、おめることなく、おくすることなく、今はたゞ命のかぎりに前進してためらふことのないのは、

今こそ戰へ

と、仰せ出されたこの御一言をいたゞいたからであります。

吉田松陰はかう申してをります。

勅を奉じて死す　死するも猶生けるなり
勅に背きて生く　生くるも猶死せるなり

これは松陰その人の信仰であるばかりでなく、日本臣民たるものゝ信仰であります。さうして、私はこゝに、われ〳〵日本人の人生觀が明かにされてゐると思ふのであります。

このことについては天理教教典衍義にかう説かれてゐます。

『我々の生命は、一個の利害に生きるための生命にあらずして、大御心、大御業を扶翼し奉るための生命であり、國運伸張のための生命である。大御業の榮えます窮み、我等の生命は、その中にあつて無限に伸びゆく。されば、大御心に信順して忠誠を效すは、義務ではなくして、生命本然の發露である。故に、何物をも求めず、たゞあるものは感謝である。こゝに日本精神の源泉があり、そして又、國民生活の根柢がある。』

戰地で花と散ることを、われ〳〵は單なる死と考へない。これを生命本然の發



露とする——生きようとする執着はさらにない。死そのものが、已むに已まれぬ行動であり、そこに永遠に生きる世界をもつてゐるのであります。といふことは、われ〳〵日本人は、めい〳〵勝手に生きてゐる、生きてをられるとは考へてをらないのであつて、天皇陛下に歸一し奉るところに、本當の生もあり死もあるといふ信仰に生きてゐるのであります。

アメリカの敗殘兵のことが傳へられてゐますが、或る者は馬鹿々々しくて戰爭などで命を捨てられないと云ひ、或る者は又、初めから戰死などはゆめ思つてゐないと云ひ、また或る者は、早く國に歸つて妻子と共に暮したいといつてゐます。彼等には、自分が享樂するための生命はあつても、その生命をさゝげるべき感激の對象を持つてゐないのであります。

これはもつともことだと思ひます。彼等は大統領といふ一政治家の指圖で戰つてゐるのであつて、人間對等の間柄で、命をかけて悔いなき感激のわく筈がないのであります。

われ〳〵は、必勝の信念をもつて起ち、しかも　現御神の勅のまに〳〵、戰場に死を求めて、そこに永遠不滅の生を得ようとしてゐるのでありますから、皇軍の向ふところ敵のないことは云ふまでもないことであります。

## 米英的思想の撃滅

さて、われ〳〵は、決して負けない、必勝は神と共にあるといふことを國體の上から明かにいたしましたが、こゝで考へねばならぬことは、現在の戰爭は武力戰だけではないといふことであります。武力戰の外に、經濟戰があり、思想謀略戰があります。武力戰に勝つても、經濟戰に負ければ結局、戰ひができないことになり、思想戰に敗れるならば、これまた內部崩壞となつて最後の戰は負けとなるのであります。

今日、勝ち拔くと云はれてゐますことは、單に飛行機と軍艦と大砲と戰車とで



勝つことだけをいうてゐるのではなく、經濟戰にも思想戰にも、銃後國民の生活戰にも、全ての戰ひに勝ちぬいて、完全な勝利を占めることをいふのであつて、こゝに、自ら、銃後戰時生活の構想をゆるがせにすることが出來ないことゝなつてくるのであります。

大東亞戰爭がはじまるとゝもに、われ〳〵の目にし耳にしますことは『米英撃滅』といふ言葉であります。もとより戰爭である以上、敵國を撃つことは當然でありますが、この撃滅といふ文字は、たゞ米英を武力をもつて叩きつぶすといふことを意味するばかりでなく、われ〳〵日本人が思想的に米英の自由主義、唯物主義、利己主義、享樂主義から完全に拔けてしまふ——つまり、かういふ思想を叩きつぶして、獨自本來の日本精神に歸ることをも含まれてゐるのでありまして、銃後に戰ふものは、特にこれを忘れてはならないと思ふのであります。

思ふに、日本は明治このかた約七十年といふ間、歐米の科學文明に追ひつくために只管努力をして來たのであります。その結果、日本は僅々七十年にして彼等

を凌ぐほどの實力をかち得たのであつて、今日の大東亞戰もその實力の上に立つてゐることを思ひますとき、この偉大なる進歩と發達とに限りなき喜びを覺えるとゝもに、われ〳〵の先輩の苦心と精進とに感謝をさゝげないではをられないのであります。私はこゝにも日本精神があると申したいのであります。科學の上においても、斷じて歐米に負けないといふ必勝の信念が、今日の科學日本を作つたのであります。またさりながら、この勝利の一面に、悲しい犧牲を出してゐる事實を思ふべきであります。

悲しむべき事實とは何でありませうか。

われ〳〵が、いつしかに、物質文明のみにとらはれてしまつた事實であります。一にも二にも歐米の文明文化に憧れ、却つて自分の立つてゐるアジアを忘れてをつたといふ事實であります。

これは今から思ふと、實に大きな行き過ぎであつたと思ふのであります。

云ふまでもなく明治に至るまでは、支那は日本にとつて絶對に忘れられない國



であつて、ある意味では支那は日本の先生であつたのでありますが、それが一度び歐米と接するや、支那を忘れ滿洲を忘れアジアを忘れてしまつたのであります。しかもこの間に、米英はわれ〳〵の足下にやつてきて、思ふ存分の侵略をするばかりか、昔の日支の關係が米支または英支の關係におきかへられやうとしつゝあつたのであります。

われ〳〵のこの迷夢がさめたのは昭和六年であります。滿洲事變を轉機としてわれ〳〵の目はしつかりとアジアの姿にそゝがれることとなりました。さりながら、態度はかく轉換したとは申せ、およそ七十年間に亙つて注ぎこまれた米英の思想は、なか〳〵一朝にして拭ひ切れるものではありません。今日眞に、われわれは、ほんとうの日本人にかへつてゐるでせうか。

皇軍の將兵は炎暑の下に、飲まず食はずで戰つてをられます。われ〳〵はまた、目に見えないこの思想の敵と、それこそ如何に物資に不自由しても、皇軍の將兵と共に、榮えある世紀の戰をしてゐる覺悟をもつて、戰ひぬかねばならないの

でありまして、これができないでは、ほんたうの意味の米英撃滅にならないのであります。

かう申しますと『バカなことをいふな、われ〳〵は眞劍にたゝかつてゐる。何が何でもやりぬく意氣でゐる。今日の日本のどこに、自由主義や享樂主義があるのか』と云ふ人があるにちがひありません。しかし悲しいかな、私はこの人のために、次のやうな事實を申さねばならないのであります。

試みに近頃、三四人も集まつて雜談してゐる話題を聞いてください。

甘いものを思ふやうに食べられないといふ話。

牛肉が月に一回くらゐしか食へないといふ話。

代用革の靴は半年ももたないといふ話。

ス・フの洋服などはぢきに破れて着られないといふやうな話。

いろ〳〵と、物質生活の不自由と困難とをならべあげた揚句、今度はかうであります。



今に南方から砂糖が山のやうに來る。

牛肉も馬革もあり餘るほどやつて來る。

濠洲の命脈は見えすいてゐる。もうしばらくすれば、純毛ばかりの洋服が着られる。

かういふことであります。われ〳〵は今日は戰爭のために不自由をしてゐるが、勝てば南方の資源に埋まるのだと、まだ〳〵先の先のことを、今にもやつて來さうな夢を描いてゐるのであります。

果してこれで、米英的色彩から拔け切つてゐると申せませうか。

いづれ物資が豐かになれば、再び昔のやうに生活を享樂しようといふこの考へ方が、まだ〳〵唯物主義のとりこになつてゐる證據とは云へないでせうか。

この點において、われ〳〵はもう一度深く反省すべきであります。

日本がこの一戰のために失つた巨億の富と、さうして金で計算のできない幾萬の尊い人命とを忘れてはならないのであります。いくら石油を獲ても、いくらゴ

ムを得ても、いくら羊毛を得ても、單なる物質をもつては、所詮、埋め合はせのつかないものを失つてゐるのであります。

われ〳〵日本人は、決して、そのやうな物欲しさに事をなす國民ではありません。簡素の中に、豐かな精神生活をたのしむ傳統に生きてきたのであります。しかし、この傳統が七十年の英米依存の生活のために、餘程弱くされたことはまた事實であつて、その證據に、前申したやうな享樂の夢をみるのであります。

われ〳〵は、この大東亞戰爭は、度々、東條首相が言明せらるゝとほり東亞共榮圈確立の戰であつて、單に資源獲得戰でないことを銘記しなければならないのであります。單に、資源獲得の戰であり、享樂主義に耽るための戰であるならば、たゞ米英にとつて代つて日本が南方を支配するだけのことであつて、それでは聖戰とも云へないし、神命のまに〳〵爲す戰さともいへないわけであります。

かういへばとて、私は、日本人は何も食はずに空氣だけで生きてゐる仙人であると考へてゐるのではありません。食はねば生きてゆけない人間であります。し



かも石油なくゴムなく石炭がなければ大東亞の盟主として日本が立つてゆけないことはよく承知してをります。事實、南方からは、やがて豐富な資源が入つてくることでありませう。南洋の商品を賣り捌いてやつて、南方四億の住民の生活の安定をはかつてやるのがわれ〳〵日本人の責任でありますから、これまで見もしなかつたやうな資源が、ドシ〳〵と流れこむであらうことは當然であります。しかし、豐かな物資に惠まれるその日を、今日のやうな米英的享樂主義の殘つてゐる態度で迎へて、それで心配ないとはどうしても考へられないのであります。アメリカにしろ英國にしろ物に滿ち溢れた國でありますが、その國々が今日どうなりつゝあるかといふ現實の姿を、眼を据ゑて觀究めるとき、私は多くの物をほんたうに處理できるだけの精神を、先づ養つておかねばならんと思ふのであります。德のないものが俄か成金になつて果して眞の幸福を得られるでせうか。これは古來個人の場合に、所謂『槿花一朝の夢』といふ例を澤山見るのでありますが、國の場合にも、これは同じことが考へられるのであります。されば、今日こそ日本

本來の簡素に強く生きる精神を眞劍に養はねばならんのであります。しかも幸なことに、現在の戰時生活がこの精神を培ふに最もよい時機なのであります。

一體、今日の戰時生活を時間的の生活と考へるのが抑々の間違ひであります。戰爭の期間だけ不自由と闘ひ、敵國の思想謀略にかゝりさへしなければよいといふ一時的のものではなく、やがて來るべき希望の時代に、世界の先頭に立つて堂堂と歩いてゆけるための、一つの試煉であると信ずるのであります。更に私の信念を披瀝いたしますならば、われ〳〵は戰爭のゆゑに今日の生活をしてゐるばかりではなくて、われ〳〵の誤り來つた世界觀と人生觀とを根本的に立直さんがために、神樣がこの戰時生活をお與へ下さつたものと確信するのであります。

日本的の世界觀、日本的の人生觀、そこには一點の米英的色彩も斷じて許されないのであります。肇國以來の純乎たる日本人として生きるためにこそ、今日の戰時生活があるのだと考へるとき、その構想も限りなく偉大となり、自らその不自由と困難とが、きはみない歡喜の種となるのであります。



私は、ほんたうに、さういふ歡喜と希望とに滿ちた戰時生活を、今こそ聲高らかに唱道したいのであります。

## 報恩感謝の精神

資源愛護、これは近頃にできた言葉であります。戰時生活に於ける一つの面とも言へるでありませう。

節米、これも近頃になつて、非常にやかましく云はれることであります。こゝにも亦戰時生活の一つの面があります。

しかしながら、資源愛護と云ひ、節米と云ひ、世紀の偉業に起つてゐる者の生活精神が果してこんな程度でよいのでせうか。これくらゐの言葉ですまされる生活で、ほんたうに我々はこの大戰爭に勝ち拔くことができるのでせうか。節米する。なぜ節米するのか。

戰時食糧を確保するために節米する。また、一般の人々は――米がないから節約する。三度々々たべてをつては足りないから代用食をする。

それでは、戰時食糧の確保ができ、增產の實があがつて、餘裕のあるやうになればどうするか。

さうなれば自然節米は解消する。今日のやうな飢じい思ひをしないで腹一杯に食べられる。

これを何と判斷すべきでせうか。申すまでもなく、資源愛護や節米が、このやうなことではほんたうの戰時生活とは申せません。これでは前に述べました單なる一時的の戰時生活であつて、次代に備へある生活とは言へないでありませう。

愛護とか節約とかいふことでは、まだ〳〵消極的でしかあり得ません。それよりも更に一歩をすゝめて、諸事萬物に報恩と感謝の念をもつてこそ、積極的なほんたうの戰時生活が營めると確信するものであります。

『菜の葉一枚も粗末にしてくれるな』



『世上世界には、枕元に食物を山ほど積んでも食べるに食べられず、水も喉を越さんというて苦しんでゐる者もある。その事思へば、私は水を頂けば水の味がする。神樣が結構に與へて下されてゐる。』

敎祖樣が貧乏のどん底におち、炊くに米もなく、點すに油もなくて月の光で糸紡ぎをされるやうな、その中にあつて、このやうな明るい勇ましい敎へを示して下されたことを思ふたびに、私は今日の生活の根柢は、この報恩と感謝に溢れた精神を外にしては、絕對にあり得ないと思ふのであります。

報恩の精神に徹して生きるときは、一杯の水といへども勿體なうて無駄にできるものではありません。一粒の米、一枚の菜の葉といへども勿體なうて粗末にしたり無雜作に捨てたりなど出來るものではありません。

水や米ばかりでなく、あらゆる物の上に、造化生成の神々の無限のお恵みを感じ、勿體なさに頭を下げるとき、一切のものをその冥加を十分に生かして使はせていたゞけるのでありまして、これでこそ、神國日本にふさはしい戰時生活とは

申せるのであります。

かういふことを今更らしく申すまでもなく、諸事萬物に報恩感謝の念を持つことは、天理教の本來の教へであり、既に私達は、教祖樣のひながたを踏んでそれを日々に實行してゐる筈であります。ちよつと考へると、これは、いかにもよわよわしく、さうしてまた消極的のやうでありますけれども、節約が一時凌ぎのものであるのに對して、これは時間を超越した節約でありますから、これほど積極的な行き方はないのであります。少くとも私は、愛護・節約といふ文字には報恩感謝といふ意味を加へねばならぬと信ずるのでありまして、戰時生活の一面の確立は、この精神と實踐の徹底に期することができるのであります。されば、私達は、日常茶飯事のこのことから、大いに世に傳へなければならないと思ひます。こゝにも私達教家の大きな御奉公の道があることを忘れぬやうにしたいものであります。



## 生活卽傳道

かく考へて見れば、私達の日々の生活はそのまゝ傳道であると申せるのであります。生活と傳道とは、決して二つに別けられる性質のものではありません。あくまでも一つであります。一時、生活と傳道とが別個のものゝやうに考へられたのも、やはり米英風の生活享樂主義の禍ひするところであります。少くとも宗教家は、われ〳〵だけは米英的思想に染まつてゐなかつたなどゝ豪語する前に、今一度心虔ましく、きびしく反省してみねばなりません。さうすれば、やはりそこには恥づべき幾多のものゝあることを見出さないわけに行かないのであります。傳道が生活と分離してゐるかに見えたことが、たしかにその一證査であると言へるでありませう。

そも〳〵、生活と傳道、かういふことを考へるやうになつたのは、最近のこと

であります。古い時代の先輩の足跡を觀れば、かういふ考へ方はつゆいさゝかも認められないのであります。ひたすらに、己れを空しうして傳道し、說教よりも、全身全靈の行を以て敎へてをられる。その姿は、まことに偲ぶも尊いことであり、力强いかぎりであります。近頃、一般に古へを偲ぶことが多くなり、眞劍になるにつれて、說敎だけが傳道の全てゞない。身を以て生きることこそ傳道だ、といふ風に考へられてまゐりましたことは、何よりも喜ばしいことであります。

今日の時代は、何彼とあまりにも聽くことが多いのであります。それは時勢の激しい變動に伴うて聽かしておかねばならんといふことが非常に多くなつたからでもありませうが、それにしても宗敎家はあまりおしやべりをしない方がよいのでないかとさへ思はれます。何となれば心ある人々は、宗敎家が何を聽かせてくれるかに期待するよりか、むしろ何をしてみせてくれるかといふ、その方にこそ大きな期待をかけてゐるからであります。

こゝに於て、私たちには生活そのものが、幾萬言を費してする說敎よりも、大



事になつてくるのであります。

誰しもこの頃は忙しさうであります。『時間は二十四時間ときまつてゐるのに、仕事だけが二人分となり三人分となつた……』かう申します。それは確かに事實であります。大勢の働き手が戰地に出てゐますし、戰爭が進めば進むにつれて、軍需品の製造が忙しくなつてくるのでありますから、當然銃後の勤めが多忙になつて來るべき筈のものであります。

しかし、唯忙しい、忙しい——と云ふばかりで、依然として今までと同じ時間だけしか働かないならば、仕事は次第にとゞこほるばかりであります。ほんたうに國を憂ひ、常に第一線にある心構へを持つ人であれば、どうして忙しいなどとやかましく不平を鳴らすでせうか。そんなことを口にする暇に、二十四時間と定まつたこの一日を、どうして三十時間にしようか、三十四時間に延ばさうかといふことに人知れず苦心してゐるにちがひありません。それでこそ眞に銃後の第一線に立つ人と言へるのであります。

かういふ苦勞も戰時生活の尊い一面であると思ひます。かういふ生活にはぴんと張り切つた弦の如く寸分の隙もない、鵝の毛ほどの無駄もない、仕事と生活とがぴつたりと一つになつてゐる。それは、側から見てゐても實に氣持がよいほどの鮮かさであります。

生活を享樂しようと云ふ氣持さへなければ、われ〳〵は常に仕事と一つになれるものであると信じます。私は先に傳道と生活といふことを申しましたが、傳道といふと、なにか特別のことのやうに考へるのが抑〻の間違ひのもとで、本來の私たちの呼び名をもつてすれば、それは、おたすけ生活であります。おたすけ生活であつてみれば、この生活以外に、もう一つの生活などのある筈がないではありませんか。私たちの生活は、おたすけ生活一つでよい。そして、このおたすけ生活一つに何ものにも代へがたい樂しみを持てば、教家としての使命は果されてゐるのであります。時代は私たちから何かを聽きたがつてゐるのではなくて、何かを見たがつてゐるのだといふことを思ひ、その自覺の下に、私たちの、おたすけ生活の構想を十分に練らなければならないのであります。



## 生活と奉公

裸一貫、身を以て生きる人にとつては、それ以外の何ものも不要であります。

私は先日、ある炭坑へひのきしんに行つた人から、かういふ話を聞きました。

『教會にをれば私は先生です。父の後をついで教會長になつてゐる若先生です。朝から晩まで先生、先生と呼ばれてゐます。ところが一たび炭坑に入つて見れば、私はも早や先生でも何でもない一介の人夫にすぎませんでした。それも新參の、筋肉のよわ〳〵しい、謂はゞ上等でない人夫です。私は見も知らぬ人から次々と命令を受けるばかりで、誰一人としてかりそめにも先生などと呼んで頭を下げてくれるものはゐません。初め私は非常に自尊心を傷つけられたやうに思ひ、また言ひやうのない淋しさに襲はれもしましたが、やがてそれは大

きな考へ違ひであることに氣がつきました。羽織と袴とをぬいで他所に行けば既に先生でも何でもなくなつてしまふ私といふ人間は、本當に皆が呼んでくれるやうに先生なのかしらん。私の先生といふ正體は、裸になればもうそれでお終ひになつてしまふ程度ではないか――言はゞ空しい形骸を守つて、それに安んじ、それに戀々としてゐた自分ではなかつたか。魂の底を搖り動かすやうな激しい反省が私を訪れたのでありました。私は深く苦しみ、その苦しみの底から、新たなる道の開けゆくことを感じました』

・私はこの話をどんなに、この人のために尊い體驗であつたと思つたことか知れません。先生と呼ばれる所以のまじめな反省が、この人の明日の生活に、どれほどの示唆と活力を與へたかしれないからであります。おそらくこの人は、何處に行つても、さうして裸一貫になつても、その魂一つの輝きがものをいふやうな本物の理をつくらねばならんと考へたことでせう。さうして、さういふ魂をつくるためには、眞劍なおたすけ生活一つより外にないことを悟つたに違ひあり



ません。

私はこの人一人にかぎらず、炭坑へひのきしんに行つたほどの人々は、みなこのやうな理合ひを悟つたことであらうと思ひます。また、是非さうあつてほしいと念じます。炭坑へいつて增産のおてつだひをしたことは申すまでもなく大きな御奉公でありましたが、それ以上に、ひのきしんの體驗をかくまで深く掘りさげて考へ、そこに宗教家としての眞實なる生活への轉換の道を發見するといふことは、何といふ喜ばしいことでありませうか。

かうして、炭坑のひのきしんは、錬成道場以上に――所謂錬成道場などではできない錬成をしたことになつたのであります。

私は、常に申してゐるのでありますが、われ〳〵の錬成は、決して單なる錬成道場に於てのみ行はれるのではない、むしろ、自ら苦辛をして生活を掘り下げ、自らづとめて苦勞の道を歩む、それがわれ〳〵の何よりの教科書であります。

道場教育とか錬成教育とか、一ト頃はなか〳〵流行したものであります。勿論、

この錬成によつて、一時の緊張は得られるのでありますが、道場を去つて家庭の生活に入つてもなほ、それを忘れないで緊張を失はないといふことは、なか〳〵至難であります。結局、魂を錬るものは日々の修業であります。

日々の修業といふことになれば、われ〳〵日本人は、生活の外に敢て行をやる必要はなかつたのであります。それをやらないと修業したやうに思へない人は、『生活』を『行』と思つてをらないからであるといふことになります。

『生活卽行』であるべき筈であります。朝起きた時、今日も亦健かに起していたゞいたといふ喜びを、毎日々々神様にさゝげてゆくことは、一寸考へれば實に易いやうで、しかもこれだけのこともなか〳〵やれるものではありません。先づ、この一事に苦心してみることも、生活の修業であります。

われ〳〵が日々に三度々々頂く食事について言つてみても、この食物が食卓に並べられるまでには、どれだけ多くの人の苦勞があり、絶大な神様の恩恵が働いてゐることであるかに思ひ至れば、お米一粒、菜ッ葉一枚、鰯のはしも有難くお



し頂かないでは口に入れられない筈のものであります。恩に狎れるといふことは何よりも恐ろしいことであり、虔しさを忘れることは何より勿體ないことであります。思へば食事一つに對しても、深い敬虔さを以て向ふとすれば毎日々々のことでもあり、眞劍にやればこれだけでも立派な修業であります。この外、歩くこと、電車に乘ること、人と話し合ふこと、仕事をすること、一つとして人生の修業でないものはありません。

みちの本來は、かういふ内容の豐かな生活を敎へられたものであります。充實した生活を以て　大御業に翼賛し奉るみちを敎へられたものであります。充實した生活とは、言ひ換へれば私のない生活であります。己れを空しうする生活であります。一切の私を去つて、全てをわれ〳〵の感激の對象に向つて燃燒させることであります。

從つて、『滅私奉公』といふことは、實を云へば眞實に自分を生かすことであります。犧牲、滅私を超えて、實は一體たる大我に歸一することであります。これ

を更に申しますならば、私たちの生活において私を俯仰天地に恥ぢない姿に生かし、お互の職域において私たちの能力を十二分に活かすのであります。私利私慾を殺して私の活動を十二分に活かし、これを大御業翼賛に捧げまつるのであります。

日本の國力といふものは、國民の力を全く生かすことを措いて外に得られるわけがありません。國民の一人々々が、私の慾を去つて私の力を國家の上に致すべきであります。

一億一心――つまり私たちが一手一つと申しますことは、これであります。

われ〳〵が銘々に自由勝手なことを考へたりしてをつては到底一心にはなれつこありません。皆が齊しく、私の立場、私の利害、私の都合を考へないでたゞ大御業翼賛といふ一點に集中したときに、はじめて眞實に一億一心と申せるのであります。

われ〳〵の目ざすところは、明瞭にして、あくまでも純一であります。されば、



一億一心、一手一つには批判の態度はないのであります。『批判は進歩の母である』とも、『批判は一つの協力である』とも云はれます。しかしながら、實踐の伴はない批判は、批判のゆゑの批判でありまして、一手一つの結ばれには斷じて許されるものではありません。

われ〳〵はその職域において、目標を一つにして、たゞつときめるのであります。飽くまでも力強い實踐に生きるのであります。批判を拔いてたゞ實踐に生きるのであります。私は、純粹の一手一つの境地といふものはこれでなくてはならぬと思ひます。

一手一つの最もうるはしい姿を、今、われ〳〵は戰場に觀てゐるのであります。戰場の倫理には絶對に批判はありません。ただ陛下の御命令と、それに絶對隨順する勇武なる將兵の實踐があるだけであります。そこにこそ、皇軍の强さと統制と神速とがあることを、銘記すべきであります。

# ひのきしん

私慾を去つての奉公、云ひかへますと、挺身奉公であります。おみちの言葉にすればひのきしんであります。

思ふに支那事變このかた、われ〳〵は日にいくたび『八紘一宇』或は『東亞共榮圏確立』といふ言葉を口にし、耳にすることでありませう。時によつては餘りにも輕々しく使ひすぎると思ふことさへあるくらゐであります。それほど容易に、輕く語るほど簡單に、この歴史的大事業が完成されるものでありませうか。しかし、われ〳〵が既にこの言葉を以て、全世界に堂々と宣言した以上は、いよいよお互ひが身を以て、この言責を果さなければならないのであります。

さて、それでは身を以てこの言責を負ふみちと言へば、われ〳〵が挺身奉公をするといふことであつて、それ以外に絶對に道はないのであります。



ひのきしんは、天理教百年の教へであります。百年間の最きにわたつて、天理教徒はこの目標を高くかゝげて明るい勇みきつた實踐をしてきたのであり、この後もなほ、永久に私たちの唯一の旗印となるべきものであります。氣負ふ人々のなかには『天理教のひのきしんもついに國家的になつた。到るところに勤勞奉仕が行はれてゐるではないか——』などと言つてゐるのを耳にすることがありますが、私はそれに對して、まだ〳〵遠いと思ふ者であります。もとより全然ないとも云ひ切れないでせうが、しかし、この現實だけを以て、われ〳〵のひのきしんの大成なりなど思ふ者あらば、それは思ひ誤りも甚しく、己惚れも過ぎると言ふものでありませう。私たちは、この勤勞奉仕に、私たち天理教徒の持つてゐる、否われ〳〵日本人の本然の姿たるべきひのきしんの眞の態度を吹きこんで、日本人全體がこのひのきしんの態度をしつかと把握するやうになつた時、即ち、勤勞奉仕が倫理的の水準から信仰的の水準にまで高められ、一塊の土を掘ることも運ぶことも、そのまゝが神に仕へる行として、自から明るい陽氣な勇み心が湧き上

るやうになつたならば、その時こそは、始めて大成といへるのでありまして、それまではます〳〵ひのきしん奉公をささげて行かねばならないと思ふのであります。

ところが、こゝに一つの問題が生れてまゐりました。それは、ひのきしんとおたすけ――云ひかへると、ひのきしんと生活といふことであります。

曰く。『ひのきしんには行かねばならないし、というて毎日毎日ひのきしんばかりでは、どうしてわれ〳〵の本務とするおたすけが出來るでせうか。一日は一日に變りないし、身體は一つです』と。

果してこのやうな對立があつてよいものでせうか。先に申しました生活と傳道のやうなものでありますが、この疑念を一刻も早く拂つて『ひのきしん』一つに敢然と進んで行かねばならないのであります。それで、この問題について私の信ずるところを明かにしておきたいと思ふのであります。

先づ私はその人に問ひたいと思ひます。



『理に仕へるといふ信念をあなたは失つてゐませんか』と。

おたすけは申すまでもなく、私たちの唯一の使命であります。私たちはもとよりお救け人であります。しかしながら、病人のおたすけは、おたすけ人自身がそこへ行かねば絶對に果されないことでありませうか。人がゆかなければ、おたすけができないと思ふやうでは、まだ信仰が至つてゐないと申すより外はありません。まして、自身がゆかねばなどゝ考へるに至つては、一つの我執とも高慢とも云へるのではありますまいか。神様は、おたすけ人の眞實をうけとつて下さるのであります。人が行く行かぬは問題ではありません。おたすけ人の腹のそこに、果して、自分はどのやうに苦しんでも、眞に人をたすけさせていたゞきたい、といふ眞實があるかないかといふことが何より問題であります。

私たちは、もつと〳〵神様のお恵みを頂くことを考へねばならないのであります。それには、餘計な人間思案をしないことであります。私たちの生活、私たちのつとめは、繰り返して申しますとほりに、己を空しうしてさゝげること、これ

一つであります。

苦勞するみちは、幾重にもあります。おたすけに行くことだけが苦勞するみちではありません。むしろ、氣にかゝる病人を一時さておいて、一切の私情を捨て、眞劍に國家に捧げて行く中に、言語に表しやうのない精神の苦勞があるのではないでせうか。この、云ふに云はれない苦勞の中に、私たちの魂が練られてゆくのであります。しかしながら、眞劍味のない、餘儀なく人についてゆくといふやうな、ひのきしんなら、折角のひのきしんも只名のみで、まことのひのきしんとはならないこと言ふまでもありません。『ひのきしん』と『おたすけ』とを對立的に考へてゐる人は、極端に申せば、ほんたうの『おたすけ』も、ほんたうの『ひのきしん』も出來ない人ではないかと私は思ひます。――卽ち、ほんたうの『おたすけ生活』をしてゐない人には、ほんたうの『ひのきしん』が出來ないのではないかと思ひます。

私たちはかねゝ『理に生きる』といふことを教祖樣から教へて頂いてをりま



す。『理に生きる』といふことは、私たちの感激の對象にむかつて全沒我になるといふことであります。もし、そのお教へのまゝに、めいゝが眞實に『理に生きてをる』ならば、斷じて『ひのきしん』と『おたすけ』とが信心の上で對立するやうなはずはないと私は確信いたします。

私はまた、教會長或は布教師諸氏の過去の經驗に訊きたいのであります。みなさまが眞劍に、感激して上級教會につとめきつてをられた留守中、みなさまの教會はいつたいどうなつてゐたでせうか。その時に、おたすけには行けない、隨つておたすけの實があがらない、たうとう教會が行き詰つた、といふやうな結果になつたでせうか。むしろ、その反對に、もしさうして教會がゆき詰り、おたすけがあがらないやうになれば、各自の信心に感激のさめてゐることを恥ぢて、一段とつとめの理を立てきつて來られた筈であります。

果してさうであるならば、――經驗の事實にこのことが明かなのでありますから――ひのきしんの場合に、今更ら何をためらふことがあるのでせう。私たちの

最も大きな感激の對象としての國家の要求に對して理をたて、つとめ切るのであります。それで、おたすけができない、おたすけがあがらないといふことは斷じてないと、私は、はつきり申しあげたいのであります。

『ひのきしん』と『おたすけ』とは決して二元的の存在では無く、もと〳〵一つなのであります。この一つに、今日は過去の日よりも更に強く生きなければならない時であります。結局、戰時生活の推進力は、一にかゝつて、私たち各自が、いかに熾烈に、いかに己を空しくして、ひのきしんに生きるかといふことにあると信ずるのであります。

## 運命を擔ふ者

以上、いろ〳〵のことを、申しあげてまゐりましたが、最後に皇國の現狀と天理教の動向とを明かにし、私たちの決意を表明して、この小著を結びたいと思ひ



ます。

大正の末、または昭和の初めの頃と云へば、今日から數へて僅かに十五年乃至は二十年前のことに過ぎません。降つて、支那事變勃發の昭和十二年となれば、まだ漸く五年にも滿たない最近の出來事であります。しかしながら、この短い五年間に世界の情勢も日本の情勢も、さうして、われ〳〵の生活精神も、すべてがまるで一變してしまつたのであります。思へばこの五年間の變り方は、平和な時の百年にも相當するかも知れません。殊に、大正、昭和の初め頃などは、遙かに遠い過去となつてしまつたのであります。その頃のやうな生活はも早や再び巡り來ることがあるまいと思はれるほど一轉したのであります。

これは決して夢ではありません。あまりにもきびしい現實の姿であります。昨日まで世界の文化の擔ひ手として威張りかへつてをつた米英に代つて、今度は、わが日本がその世界文化の擔ひ手にならうとしてゐるのであります。この激しい

變動に會うて、國のあらゆる部門は、一切の米英的色彩を捨て、純粹な日本的精神に立ち歸つてゐるのであります。もとよりわが天理教も亦その通りであります。立教百年を以てその姿を一新し、私たちは今、私たちの世代に新しい天理教を、まことの天理教を打ち樹てるのだといふ強い自覺に生き、そのゆゑにこそ血みどろになつて新生の苦難を嘗めてゐるのであります。

まさしく私たちは、この双肩に新しい天理教の樹立といふ一大責任を負うてゐます。しかしてこれは、全く血のにじむやうな實踐であります。これは、舊い天理教の修繕でもなければ、塗替へでもありません。また、誤つてゐた過去と現在とを體よくつなぎ合はさんがための方法でも勿論ありません。現在から未來にかけての開拓と創造との苦難にみちた實踐であります。こゝに、今日の天理教徒の氣魄があるといふことを、特に私は申し上げたいのであります。さうして、この氣魄は、獨り天理教のための氣魄ではなく、わが日本がやりつゝある大東亞の建設といふ大きな仕事を擔つて立つがためのものであることは申すまでもないこと



であります。

この意味から申しますならば、私たちは、みんな等しく一人々々が皇國の運命を擔つてゐるのであります。運命を擔つて立つ者の心境は悲壯であります。また崇高であります。私たちは、あくまでも國の運命を擔ふ者であるといふ自覺をもち、夢にも時局便乘主義であつてはならないのであります。

世の中が變つたので、もう昨日までのやうな行き方ではいけない、それでは立ち後れるとて、たゞ單に世相の變轉に對して身を守らうために、昨日までの考へ方を今日の現實に近づけようとするやうな、そんな便乘的な態度は、斷じて國の運命を擔つてゐるものゝ立場にはあり得べくもないし、又あつてはならないのであります。

かくして、私達は絶對に眞劍であります。これをたゞ眞劍なりといつたゞけではまだ〳〵言葉が足りないやうな氣がする位です。先輩の言葉を借りて、マ眞劍とでも申してみたならば、或は今日の私たちの氣持を、やゝ云ひ表し得るかのや

うに思はれます。

さて私達は、かくマ眞劍なのでありますから、一旦やりはじめた仕事は、如何なることがあらうともかならず最後までやりぬかねば承知できないのであります。

つく〳〵考へて見ますのに、これまでの私たちは、餘りにも仕事を追ひすぎてゐたやうであります。一つのことをはじめるとすると、最初の中はなか〳〵熱心でありますが、やがて熱がさめてくれば、その結果もよくみないで、やがてまた新しいことに手を染めるといふやうに、いつも目新しさばかりを求めつゞけてゐたやうに思はれます。見やうによれば、いつまでも一つの事に執着しないで、次から次へと新しい道を開くことは、いかにも積極的であつて、華々しくて、まことに結構かもしれません。しかし、華々しさをばかり希つて、何事によらず有耶無耶のうちに葬り去つてしまふといふのでは、決して眞劍な態度とは申せない、ましてや國の運命を擔つて立つ者の態度とはさら〳〵に申されません。

宗教の仕事が、萬が一にも流行歌のやうに、たゞ新奇だけを追うてゆくとした



ならば、實にその本領を忘れるもまた甚しきにすぎると言ふべきであります。

今や、全身全靈、燃え立つ火ともなつてマ眞劍に皇國とともに起つてゐる私たちであります。どうしてそのやうな氣紛れと場當り主義で承知できるでせうか。人をも自らをも許せるでせうか。あらゆることを、マ眞劍にやり、マ眞劍に掘り下げてゆくことに、どんなに辛くても苦しくても、否、辛ければ、苦しければ、愈〻激しい喜びと希望を覺えずには居られないのであります。

かう申しますことは、決して消極的になるといふことではありません。日本の進展とともに、私たちの果さねばならぬ仕事の量が、これまでに比べて倍加も三倍加もすることは既に承知してゐるのであります。さうして、それを勇ましく、俊敏に果して、この大建設戰の礎石の一つなりとも積まうと決心してゐるのであります。眞劍に行ずるといふことは、かうした積極面と併行して、やりはじめたことは一つ一つを飽くまでも掘り下げ、最後までやりぬくといふ、ふせこみの精神と態度とを忘れないといふことであります。

みたみわれいけるしるしありあめつちのさか
ゆるときにあへらくおもへば

われ〳〵は今、この歌を高らかに誦したいと思ひます。大いなる東亞建設といふ、世界新秩序確立といふ大業を遂行すべき今の世に生きてゐるわれ〳〵日本人は、榮えあるこの大殿堂を築かんが爲に、擧つて、或は大工ともなり石工ともなり、各々の職域において懸命にのみをふるつてゐるのであります。われ〳〵もまた、たとひ黄金の釘は打てなくても、鐵の釘一本でもいゝ、眞心をこめて、力一杯、この大殿堂の柱にしつかと打ちこみたいものであります。



424
86

昭和十七年五月五日　印刷
昭和十七年五月十日　發行　（五〇、〇〇〇部）

定價二十錢

著者　奈良縣丹波市町三島　中山爲信
發行者　奈良縣丹波市町川原城三〇七　岡島善次
印刷所　奈良縣丹波市町川原城三〇七　天理時報社
發行所　右代表者　岡島善次　天理時報社
會員番號一一九五〇一番
奈良縣丹波市町川原城三〇七
振替・大阪・二八四二一番
東京・豐島區駒込六丁目八七五

日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

終